

空蟬物語における宿世

——源氏と空蟬との宿世の享受について——

中山 幸子

一、はじめに

本論は、先行研究における「宿世」論についての考察と、空蟬物語における源氏と空蟬とが、「宿世」をどのように享受していたかを考察するものである。先行研究における「宿世」論についての考察、および作中人物の「宿世」の受け止め方についての考察は、作品を理解する上に重要なことであり、意義のあることであるという見解のもとに本研究をするに至った。

本論は、窪田空穂の「偶然が生涯の運命となる」⁽¹⁾という論、石田穰二の「宿世はこの世における成行き」⁽²⁾であるという論、上坂信男の「漱石は「宿世」と同様に「偶然」を用いている」⁽³⁾という論、および中田武司の「「宿世」観は、「期待」観と同一線上に考えられる」⁽⁴⁾という論を踏まえて言及するものである。

筆者は、一つとして窪田空穂や上坂信男の論を受けて、「宿世」は、「偶然」と同一線上にあるという論を考えた。

二つとして、石田穰二の論を受けて、「宿世」は、「この世における偶然の成行き」によって生じた「しがらみ」であるという論を考えた。

人には、それぞれの「宿世」がある。人は、その「宿世」をどのように受け止めるかによって、その人の人生は変わることになる。三つとして筆者独自の考えから、「宿世」を「方便」として受け止めていたと見ることができるといふ論を考えた。

四つとして、中田武司の論を受けて、「宿世」は、「人生の指針」と成り得るといふ論を考えた。

以上の四つの論について、それぞれの関係を説明すると、前者一つは、「宿世」について述べたものである。後者一つは、前者で述べた「宿世」というものを、作中人物がどのように受け止めるかという受け止め方について述べたものである。なお、前者の二つについて、さらに説明を加えると次のようになる。一つについて見ると、「宿世」は「偶然」によって生ずるものなので、「宿世」と「偶然」は、同一線上に考えられるとした。二つについて見ると、その「偶然」は、どういう形で起きるかという点、「この世の成行き」によって生ずるものである。つまり、「この世の偶然の成行き」によって生じたものが、その人を拘束することになる。それが、「しがらみ」である。その「しがらみ」が、「宿世」であるとしたものである。すなわち、一つと二つは、「宿世」を段階的に説明したものである。

後者の二つについてさらに説明を加えると、三つとしたものは、「宿世」を「方便」として、受け止めていたという考えを述べたものである。四つとしたものは、「宿世」を人生の「道しるべ」すなわち「人生の指針」として受け止めていたという考えを述べたものである。

あらかじめ、本論の結論の見通しを述べて置くと、次のようになる。

源氏は、「この世における偶然の成行き」によって空蟬と邂逅した。源氏は、「宿世」の意味を含む「浅くはあらい」「さ

るべきにや」「契り」等の言葉を用いて空蟬を口説いた。源氏は、空蟬を口説くための方便として「宿世」を用いた。すなわち、源氏は、「宿世」を「方便」として受け止めていたものと見る事ができる。

空蟬は、「この世における偶然の成行き」によって生じた「しがらみ」に困惑した。が、空蟬は、「しがらみ」を「宿世」という言葉によって認識し納得した。空蟬は、「しがらみ」を、「宿世」として納得することによって心の平安を得た。「宿世」は、「予期」や「期待」観を内蔵することから、未来への「道しるべ」となり得る。「道しるべ」は、「人生の指針」と成り得る。空蟬は、「宿世」を未来への「道しるべ」、すなわち「人生の指針」として受け止めていたものと見る事ができる。

二、先行研究における「宿世」論

先行研究における多くの「宿世」論の中から、主なものを取り上げる。

「宿世」は、「インド仏教経典を漢訳する際に新しく造語された言葉であり、漢訳仏教経典において初めて見られる」⁽⁵⁾。

「宿世」の意味は、「一応参考のために稿末に注記した」⁽⁶⁾。「宿世」は、「日本人の人生観・世界観に最もよく浸透した仏教の觀念の一つである」ということである。「宿世」は、日本人に好まれた言葉であるともとれる。「宿世」ということによって、人を恨むこともなく、自分自身を攻めることもなく心の平安を得ていたものと見られる。もし、「宿世」という言葉がなかったとしたならば、自分に不都合なことがおきた場合には人を恨むことになったのではないかと見られる。人を恨むと精神状態は、平静を保つことが困難になる。

「宿世」という言葉によって、多くの日本人は心の安らぎを得ていたものと見ることができ。

多屋頼俊⁽⁷⁾や鈴木日出男⁽⁸⁾が、「宿世」は「三世（前世・現世・来世）」であると述べている。人は、前世があって、現世が

あって、来世があると考えることによって、未来への「期待」観がわいて来るであろう。目の前の苦勞も未来をよりよく生きるための手段であるというように考えれば人生が明るくなるであろう。「宿世」は、心の支えとなるので人々の間に行き渡っていたものと見られる。このことについては、柴田迪子が、「当時に於いては宿世思想が一般的に広く人々の間に受け入れられ、「宿世」あるいは「契り」といった言葉が特別の言葉ではなくごく普通の言葉として使われていた為と考えるとよいであろう⁽⁹⁾」と述べている。

また、石田穰二も前出論文において、「宿世」は、当時ごく普通に用いられていたことを述べている。なお、久慈きみ代は、『源氏物語』における「宿世」について、「仏教観に裏打ちされた用例はみななかったように思う⁽¹⁰⁾」としている。柴田迪子や石田穰二および久慈きみ代の論を裏付けるように、『源氏物語』には「宿世」の用例が一二〇例⁽¹¹⁾を数える。また、「宿世」の意味を含む言葉は、「さるべき」「さるべきにや」「契り」「前の世」等がある。『源氏物語』に「契り」の用例は、一九〇例ある。また、「宿世」「さるべきにや」「契り」「前の世」等の言葉を用いないで文脈の中で「宿世」が語られている例もある。

なお、「宿世」は、男性よりも女性の方に用例が多く見られる。この点について、柴田迪子や久慈きみ代は前出論文においてすでに述べている。この論を裏付けるように、空蟬物語における空蟬にも「宿世」の用例が四例見られる。一般論としての用例をも含めると五例になる。それに対して、空蟬物語、すなわち「帚木」「閨屋」の各巻における源氏は、「宿世」の用例が一例も見られない。源氏は、「浅くはあらじ」が一例、「さるべきにや」が一例、「契り」が二例である。その他、手紙のなかでの「契り」の用例が一例見られる。「契り」は「契る」の名詞形であって、仏教思想に基づく前世からの因縁、および宿因をいうものである。また、「契り」は、男女の交わり、夫婦の交わりについてもいう語である。「契り」は、男女とも同様に用例が見られる。柴田迪子は、前出論文において「契り」は、「対人関係の宿縁を述べているものが多く、又、

宿縁に較べると表現の自由が見られた」(一九頁)としている。このことについては、筆者も認めるところである。「契り」は、対人関係についての用例が多いので、具体的であるということが出来る。「宿世」は、「契り」に比べると抽象的で、前世との関わりが濃厚であるということが出来る。

源氏は、空蟬を口説く場合に「契り」を用いている。が、「宿世」の語は用いていない。

先行研究の多くは、「宿世」を意味する言葉を包括的に「宿世」として述べている。本論もそれにならって包括的に「宿世」として論述する。

「宿世」を「運命」とする論を述べている者に、井上光貞・目加田さくをがいる。井上は、「宿世というのは漠然と運命のことである」⁽¹²⁾とし、目加田は、「人間の前世からの因縁」、更には「男女の結ばれる宿縁」、今日の言葉でよく使う「運命」の意に、用いる⁽¹³⁾としている。両氏が述べているように、広義に解釈すれば、人間に降り掛かることは、すべて「運命」として認識することもできる。また、石田穰二は、前出論文において、「前世の因縁」といふ誤解を招きやすい言葉に代へて「この世における運命」といふほどに言ってみれば、総ての用例は満足させられ得る」(二二頁)と述べている。石田は、「宿世」を「この世における運命」としている。「運命」は、「運命」というよりも決定的な感じを与える言葉にもとれる。

佐藤亨は、『源氏物語』での「宿世」の意味は「前世」「前世の因縁」「運命」の三つに分けることができるが、それぞれニュアンスを異にする⁽¹⁴⁾と述べている。佐藤亨が述べているように、「宿世」といっても、文脈において微妙に異なる意味があることは否定できない。したがって、筆者は、用例ごとに文脈から判断して解釈することが望ましいと考えている。なお、森岡常夫は、「宿世」について「現世の果報」⁽¹⁵⁾を言うとしている。森岡常夫は、「宿世」を幸運なことに視点をおいて述べたものと見られる。

「宿世」を「諦観」という観点から述べたものに、田中常正・柴田迪子がいる。田中常正は、「自己の運命として諦観した」⁽¹⁶⁾と述べている。また、柴田迪子も、前出論文において、「女性であるがゆえの諦めとして宿世を受け取っているものがある」(一七頁)ことを述べている。「宿世」を「諦観」として受け止めた場合には、未来に対する「期待」観は望めない。したがって、「宿世」というものが暗い感じになってしまうことは否めない。「宿世」が暗いものであって、「期待」観が望めないものであったとしたならば、人々の関心からは遠ざかることになっていただろうと思われる。先にも述べたとおり、「宿世」が、一般化していたという背景には、未来に対する「期待」観があったからであろうという見解をもっている。

「宿世」を時間との関係において述べているものに、佐藤勢紀子および趙青がいる。佐藤勢紀子は、宿世は、「各自の過去と現在、現在と未来を連続の相のもとに捉えしめる上で大きな役割を果たしていたのではあるまいか」⁽¹⁷⁾と述べている。佐藤勢紀子は、「宿世思想」は現世における「時間経過」を取り込んでいる点を指摘している。趙青も時間を認識させる視点から次のように述べている。趙青は、前出の論文において「空間」を示す「界」に対して、「世」は時間を示している。「三世」及び「過去世」、「未来世」、「現在世」のように、「世」を語尾に付けた表現は、一般的な時間表現である過去、未来、現在とは区別し、仏教独特の時間認識を示すためのものである」(二一八二頁)と述べている。また、趙は、同論文において『源氏物語』における「宿世」を、仏教の根本的な精神の表現として捉えるのは適切でない」(二一八九頁)と述べている。筆者も同感である。『源氏物語』は、仏教の説話集として書かれたものではなく、作中人物の生き方を通して「宿世」が語られたものである。

「宿世」は、『源氏物語』においてどのような形で用いられていたのかを見てみよう。

多屋頼俊は、前出著において「登場人物のすべてに対して、その人生観の根底に宿世の因縁とゆう思想が横たわって

る。(中略)宿世の因縁が人生百般のことの原動力になって動いていると信ぜられている(七三頁)と述べている。多屋頼俊は、「宿世」が『源氏物語』の基底をなすことを指摘している。作中人物のすべてに対して「宿世の因縁」ということが思想になっていると述べている。作中人物が、それぞれの「宿世」をもっていることを鑑みれば異論を差し挟む余地はない。

いくつかの例をあげれば、女性の一般論としては、「女の宿世はいと浮かびたるなんあはれにはべる」としている。空蟬の「宿世」は、「心得ぬ宿世」であり、「今は言ふかひなき宿世」である。藤壺は、「あさましき御宿世」であり、「のがれがたかりける御宿世」でもある。が、藤壺は、「高き宿世、世の栄えも並ぶ人」もないものである。源氏は、「宿世遠かりけり」とある。源氏は、臣籍降下したので、皇位からは遠いものであったことを指している。女三宮にとっての「宿世」は、「宿世などいふらむものは目に見えぬわざにて」とある。浮舟は、「心憂き宿世かな」とある。薫は、「わが宿世はいとやむごとなし」としている。数例をあげても、皆それぞれの「宿世」をもっている。作中人物は、それぞれの「宿世」を背負って生きている。『源氏物語』は、「宿世」を背負った人々の人生が語られているので、「宿世」が作品の根底に横たわっているということが出来る。

その他にも「宿世」が、『源氏物語』の基底あるいは根底に据えられていることを述べているものをあげると、次のようになる。

池田義孝は、本居宣長の「もののおはれ」論の基底に「宿世」観のペシミズムのあることを認めていることを述べている。さらに、「宿世観、因果観は、物語作者にとっては作中人物の運命の先取りであり透視であり、予告であった。構想も叙述もこの糸を離れてはなかった」⁽¹⁸⁾と論じている。池田義孝も、「宿世」が『源氏物語』の基底をなすことを論じている。

重松信弘も、「宿世観が物語の基調に据えられている」⁽¹⁹⁾ことを述べている。

益田勝美は、「生きていく悩みを人間が世から世へと受けつぐ他ないという主題を語るために、物語の方法として宿世観を導入した」⁽²⁰⁾と述べている。作中人物は、皆それぞれに悩みを抱えて生きている。その悩みの根源となるものが「宿世」であるということができよう。「宿世」が、全編を貫く根幹となっていることは確かなことである。

小野村洋子は、本居宣長の「もののははれ」を言及して、「宿世」と「あはれ」との関わりを述べている。「源氏物語」の「宿世」は、「精神的基底」として重要な意義を持つ⁽²¹⁾ことを論じている。「源氏物語」における「宿世」は、作中人物の精神に関わることが多い。「宿世」は、作中人物の精神的基底に据えられているということができよう。「宿世」に伴って「あはれ」という心情が生じる。したがって、「宿世」と「あはれ」との関係は密接である。

佐藤勢紀子は、「宿世」が『源氏物語』のほぼ全編にわたって、物語の構造に絡んでいる⁽²²⁾ことを述べ、小野村洋子の「宿世」と「あはれ」との関係に対して、「宿世」と「無常」との関係の用例が多いことを理由に反論を唱えている。が、「宿世」が、『源氏物語』の基底をなすことにおいては、小野村洋子の論に重なる部分がある。

森田喜郎は、「宿世」が『源氏物語』の本質を形成している「あはれ」を導いている⁽²³⁾と述べている。佐藤亨も、前出論文のなかで『源氏物語』における「宿世」が、作品の基底を成す事を述べている。

武原弘は、「物語の基底部に潜在可能な主題として、宿世の思想は不断に問われ続けているのではないか⁽²⁴⁾」と述べている。武原弘は、『源氏物語』全編についてではなく「須磨・明石」の巻の主題として、「宿世」が基底に潜在することを述べている。

日向一雅は、「桐壺帝は宮廷社会の指弾に敢然と逆らって更衣を愛し通した。源氏は、父帝の生き方の軌跡を踏襲しているかのように見える⁽²⁵⁾」としている。日向一雅は、「宿世」を桐壺帝と源氏という親子関係から、それぞれ最愛の女性に対する愛の姿を通して述べている。「宿世」の物語の構造として大局的に捉えている点に特色が見られる。

主な「宿世」論をあげると以上のようなものである。本論で取り上げる四者の論については、次の項において本文の用例についての考察を通して述べる。

二、源氏と空蟬との「宿世」の享受

源氏と空蟬との「宿世」の享受について、本文の「宿世」の用例をもとに考察する。最初に、筆者の論として、「宿世」は、「偶然」と同一線上に考えられるという論について考察を試みる。

次の用例から見よう。「女の宿世はいと浮びたるなんあはれにはべる」（帚木・一七二頁）は、紀伊守が、源氏に語る女の一般論としての「宿世」である。紀伊守は、女の「宿世」がいかにかに定めがたいものであるかを語っている。一般論としての「宿世」には、空蟬の「宿世」も含まれている。空蟬の「宿世」が、浮き草のように定めがたい。空蟬の「宿世」が、「偶然」のことによって、はかなく変化していく様子を見よう。「伊予守朝臣の家につしむことはべりて、女房なんまかり移れる」（帚木・一六八―九頁）とある。空蟬は、伊予守朝臣の家に謹慎することがあって、紀伊守邸に来ていた。空蟬や女房たちが紀伊守邸に来ていたのは、「偶然」のことであったことが知られる。「酔ひすすみて、みな人々簀子すのこに臥しつゝ、静まりぬ」（帚木・一七三頁）とある。源氏のお供してきた人々が皆酒に酔って簀子に横たわって寝てしまっていた。あたりが静まり返っていたのも「偶然」のことである。人々が、「（中将）下に湯しもにおりて、ただ今参らむとはべり」と言ふ（帚木・一七四頁）とある。女房たちは、中将が下に降りて湯を使っていることを話している。いつもは空蟬の傍にいる中将が不在なのも「偶然」のことである。源氏は、偶然が重なって誰にも気付かれることなく空蟬の部屋の前まで来ていた。「掛け金をこころみに引き開けたまへれば、あなたよりは鎖かぎさざりけり」（帚木・一七四頁）とある。源氏は、試みに空蟬の部屋を開けて見た。部屋の向こう側からは掛け金が指してなかった。部屋の戸は開いた。これも「偶

然」のことである。「空蟬は」ただ独りいとささやかにて臥したり（帚木・一七四頁）とある。「偶然」が「偶然」を呼ぶ場面である。空蟬は、ただ独りでまことに小ぶりの感じで寝ていた。いつもは空蟬の傍にいる中将が、湯に下りて留守であったのも偶然であった。空蟬が独りで寝ていたというのも「偶然」のことである。

さらに、空蟬には偶然が重なることになる。「空蟬は」物におそはるる心地して、やとおびゆれど、顔に衣のさはりて、音にも立てず」（帚木・一七五頁）とある。空蟬は、驚いて声を出した。が、顔に衣がかかっていた。空蟬の声は、外に漏れなかった。空蟬は、「昼ならましかは、のぞきて見たてまつりてまし」とねぶたげに言ひて顔ひき入れつる声す」（帚木・一七五頁）とある。空蟬は、自ら自分の顔に衣を掛けたまま寝てしまっていた。空蟬の顔に衣がかかっていたのも「偶然」のことである。源氏は、このようにいくつもの「偶然」が重なって空蟬との邂逅を果たした。

空蟬は、何も知らないうちに「偶然」によって、思わぬ事態になってしまった。多屋頼俊は、「宿世」に対して「人為的には如何ともしがたい」としているが、空蟬の場合も全く同じであった。空蟬は、自分の意志とは無関係に「偶然」によって「宿世」が形成されてしまった。このように、空蟬の「宿世」は、「偶然」と同一線上に考えることができる。窪田空穂は、「偶然」が重なると生涯の運命になる」ことを述べている。空蟬の場合も「偶然」が重なって、振り返ってみるとそれが彼女の運命となっていた。また、上坂信男は、漱石が「宿世」の代わりに「偶然」を用いて場面を展開していることを指摘している。上坂信男が指摘しているように、空蟬の場合も「偶然」によって生じたことが、「宿世」に発展している。このことから「偶然」と「宿世」との密接な関係を指摘することができる。窪田空穂は、「偶然」と「運命」について、上坂信男は、「偶然」と「宿世」について述べている。筆者は、両者の論を受けて、「宿世」は「偶然」と同一線上に考えることができるという論を考えた。

次に、「宿世」は「方便」となり得るといふ論について考察をする。次の用例から見よう。

源氏は、「うちつけに、深からぬ心のほど見たまふらん、ことわりなれど、年ごろ思ひわたる心の中も聞こえ知らせむとてなん。かかるをりを待ち出でたるも、さらに浅くはあらじと思ひなしたまへ」（帚木・一七五頁）と空蟬に語っている。源氏が空蟬を口説く場面である。源氏は、「浅くはあらじ」と空蟬を口説いた。「浅くはあらじ」⁽²⁶⁾とあるが、筆者は、「宿世浅くはあらじ」の「宿世」が省略されたものと見ている。源氏は、「宿世」を方便に空蟬を口説いた。なぜ、源氏は、空蟬を口説いたのか。雨夜の品定めにおける左馬頭の弁によるという説もある。確かに左馬頭の弁によるころもあることは否定できない。が、筆者は、そればかりとは思えない。源氏は、故衛門守が生前、桐壺帝に空蟬の入内の意向を漏らしていたことを耳にしていた。源氏は、入内の話があったという空蟬に関心をもっていたというように見るのが穏当であろう。源氏は、継母藤壺への憧憬の念を忘れさせてくれるほどの女性との邂逅を望んでいたものと見られる。源氏は、空蟬との邂逅を「宿世」として納得させようとした。源氏は、空蟬が実父との死別によって現在は零落しているが、入内を所望するほどの血筋のよさに注目したものと見られる。血筋のよい女性との間に女兒が誕生すれば、将来入内ということも考えられる。源氏は、よりよい人生を送るための生活基盤を築こうとしていたものと見ることが出来る。すなわち、源氏は、「宿世」を「方便」に空蟬を口説いたと見ることが出来る。

さらに、源氏は、「あながちなるすき心はさらにならぬを。さるべきにや、げにかくあはめられたてまつるもことわりなる心まどひを、みづからもあやしきまでなん」など、まめだちてよろづにのたまへど」（帚木・一七七頁）とあるように空蟬を口説いている。「さるべきにや」は、「前世からこうなる因縁があったからであろうか」という意である。源氏は、「さるべきにや」と「宿世」を意味する言葉をもって、空蟬を口説いている。源氏は、女性を口説く常套手段として「宿世」を用いている。源氏は、「宿世」を方便として空蟬を口説いた。源氏にとって「宿世」は、女性を口説くための「方便」として受け止めていたものと見ることが出来る。

次の用例を見てみよう。

源氏は、「などかくうとましきものにしも思すべき。おぼえなきさまなるしもこそ、契りあると思ひたまはめ。むげに世を思ひ知らぬやうにおぼほれたまふなん、いとつらき」と、恨みられて、「(帚木・一七八頁)とある。源氏は、「契り」を「前世からの宿縁」の意味に用いている。源氏は、当該部分においても「宿世」を「方便」に空蟬を口説いた。すなわち、源氏は、「宿世」を「方便」として受け止めていたものと見ることができ、最後に、次の用例を見てみよう。

源氏「一日は契り知られしを、さは思し知りけむや。

わくらばに行きあふみちをたのみしもなほかひなしやしほならぬ海

関守の、さもうらやましく、めざましかりしかな」

とあり。

(関屋・三五二頁)

源氏は、「偶然」にも逢坂の関で空蟬一行と出会った。源氏は、右衛門佐を呼び寄せて、空蟬に手紙を送った。「契り」は、「宿縁の深さ」の意味である。源氏は、空蟬一行と出会ったことによって、「宿縁の深さ」を知ったといっている。源氏の詠んだ和歌は、「わくらばに」ということで、「偶然に」という言葉で歌い出している。先にも述べた通り、「偶然」と「宿世」との密接な関係を知ることができる。源氏は、「宿世」を「方便」に空蟬を口説こうとしている。すなわち、源氏は、「宿世」を「方便」として受け止めていたものと見ることができ、

なお、「宿世」を「方便」として受け止めていたものとする論は、筆者の独自のものである。が、この論を辿れば、「宿

世」が当時一般に普及していたということにヒントを得ているということができる。

続いて、筆者の論である「宿世」は、「この世における偶然の成行き」によって生じた「しがらみ」であるということについて考察する。

石田穰二は、「宿世」は「この世における成行き」であると述べている。確かに「宿世」は、「この世における成行き」に関わることに相違ない。しかし、「この世における成行き」が、「宿世」となり得るには、当事者に対しての拘束力によると考える。「この世における成行き」が、当事者に何の関わりもなく過ぎてしまった場合には、「宿世」とはならない。「この世における成行き」によって生じた拘束によって、当事者が自由に行動することを妨げる状態が「しがらみ」である。すなわち、「宿世」は、「この世における成行き」によって生じた「しがらみ」であると定義する。「しがらみ」は、「偶然」が重なることによって生じるものである。つまり、「宿世」は、「この世における偶然の成行き」によって生じた「しがらみ」である。

上坂信男は、漱石が、「宿世」の代わりに「偶然」を用いて場面を展開していることを指摘している。先に述べたように、「宿世」は「偶然」と深い関わりを持っている。また、窪田空穂が「偶然」について「偶然」が重なりと生涯の運命になる」ことを述べている。このように、窪田空穂も上坂信男も「宿世」と「偶然」との関わりを述べている。すなわち、「宿世」は、「この世における偶然の成行き」によって生じた「しがらみ」であるということができる。このことを、本文の用例を通して考察してみよう。

女「いとかくき身のほどのさだまらぬ、ありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじきわが頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ慰めましを、いとかう仮なるうき寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく思

うたまへまどはるるなり。よし、今は見きとなかけそ」

(帚木・一七六頁)

「いとかく…ありしながらの身にて」とは、伊予介の後妻という身分に定まらない以前のことを指す。すなわち、故衛門督の娘の身で源氏の好意に預かるのであったならば、よかったということである。「仮なるうき寝」とは、空蟬が紀伊守邸に来ていた時に、源氏との関係が出来たことを指している。空蟬は、一夜妻的な存在に対してプライドが許さないのである。空蟬は、「今は見きとなかけそ」と源氏に口止めをしている。当該部分には、「宿世」の言葉は用いられていない。また、「宿世」の意を含む言葉も見られない。が、文脈から見て空蟬の「宿世」に関わる内容であることは明らかである。なお、佐藤勢紀子は、前出著において「宿世」の語を用いないで文脈において「宿世」を表現している場合があることを述べている。筆者は、当該部分がその例に該当すると見ている。空蟬は、「この世における偶然の成行き」によって生じた「しがらみ」に困惑している場面である。

次も、同様に「しがらみ」に困惑している場面である。

源氏「見し夢をあふ夜ありやとなげく間に目さへあはでどころも経にける

寝る夜なければ」など、目も及ばぬ御書きさまも、霧りふたがりて、心得ぬ宿世うち添へりける身を思ひつづけて、

臥したまへり。

(帚木・一八二―三頁)

源氏は、小君を文使いとして、空蟬に和歌を送った。空蟬は、源氏の筆跡も涙で見ることができなかつた。空蟬は、「心得ぬ宿世」がつけ加わったことを思いながら横になった。空蟬は、「この世の偶然の成行き」によって生じた「しがらみ」

を「心得ぬ宿世」として認識した。空蟬は、「しがらみ」を「宿世」として認識し納得することによって、心の平安を得た。この筆者の論に対しては、久慈きみ代も同様の見解を述べている。久慈きみ代は、前出論文において、「感覚的に、身に迫りきた整理し難い事態そのものを、宿世（前世からの因縁）であると発して、一往形を付けて、心の平安を得る」（七一頁）ことを述べている。ただし、久慈きみ代は、筆者のように、「この世の偶然の成行き」によって生じた「しがらみ」を「宿世」とする見方はしていない。久慈きみ代は、「宿世」を「前世からの因縁」として述べていることを付け加えて置く。

最後に、「宿世」は、「期待」観と同一線上に考えられることから、「人生の指針」と成り得るといふ筆者の論について考察をする。

次の用例から見ていく。「とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心むじんに心づきなくてやみなむと、思ひはてたり」（帚木・一八七頁）とある。当該部分は、空蟬の心中思惟の部分である。空蟬は、源氏が逢瀬を求めて訪ねて来たが、中将という女房の局に逃れた。

先にも触れたように、従来における「宿世」論のなかには、諦観的に捉えられていたものもあった。が、中田武司は、「宿世」観は、「期待」観と同一線上にあるということ述べている。筆者は、中田武司が述べている「宿世」観が内蔵する「予期」や「期待」観に注目した。

筆者は、「予期」や「期待」観は、未来に向けての「道しるべ」と成り得ると解釈する。「宿世」は、諦観ではなく、未来に向けての「道しるべ」である。未来に向けての「道しるべ」は、すなわち「人生の指針」と成り得るといふ論を考えた。

藤井貞和は、「宿世」もまた、「予言」の一部であるかのごとく27と述べている。「宿世」もまた「予言」の一部であるかのごとくだという考えに注目したい。「宿世」は「予言」の一部であると断定はしていない。が、未来に向けての「道

しるべ」を暗示していることになろう。未来に向けての「道しるべ」は、すなわち、「人生の指針」と成り得る。当該部分においても、空蟬は、「しがらみ」を「今は言ふかひなき宿世なりければ」と「宿世」として認識し納得した。空蟬は、「宿世」として納得することによって心の平安を得た。さらに、空蟬は、「宿世」を「人生の指針」として、「無心に心づぎなくてやみなむ」と自分自身の生きる道を決定した。空蟬は、「宿世」を「人生の指針」として受け止めていたものと見ることができる。

筆者は、中田武司の「宿世」は、「期待」観と同一線上に考えられるという論、および藤井貞和の「宿世」は、「予言」の一部であるかのごとくという論を受けて、「宿世」は未来への「道しるべ」すなわち、「人生の指針」と成り得るという論を考えた。

さらに、次の用例を見てみよう。「女君、心うき宿世ありて、この人にさへ後れて、いかなるさまにはふれまどふべきにかあらん」(関屋・三五四頁)とある。当該部分は、空蟬の心中思惟の部分である。常陸介は、老齢のために病床にある。空蟬は、「この世の成行き」によって生じた「しがらみ」を「宿世」として認識した。空蟬は、親にも早く死別し、夫とも死別したならば、この後どのようにして生きていこうかと憂慮している。さらに、その後の空蟬について見てみよう。

河内守「あはれにのたまひおきし、数ならずとも、思し疎つとまでのたまはせよ」など追つ従まし寄りて、いとあさましき心の見えければ、うき宿世ある身にて、かく生きとまりて、はてはてはめづらしきことどもを聞き添そふるかなと、人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせて、尼にになりにけり。

(関屋・三五四頁)

空蟬は、夫と死別後、義理の子供である河内守に言い寄られた。空蟬は、「この世における偶然の成行き」によって生じ

た「しがらみ」を「うき宿世」として認識し納得した。空蟬は、「うき宿世」として納得することによって心の平安を得た。先に述べたように、「宿世」観は、「期待」観と同一線上にあることから、「宿世」は未来への「道しるべ」となる。空蟬は、「宿世」を未来への「道しるべ」すなわち「人生の指針」とした。空蟬は、誰にも相談することなく、「宿世」を「人生の指針」として、自主的、主体的に生きる道を選択して尼になった。このことから、空蟬は、「宿世」を未来への「道しるべ」すなわち、「人生の指針」として受け止めていたものと見ることができる。

四、おわりに

「宿世」論の先行研究は多く見られるが、本論は、主として次の四者の論を踏まえて言及したものである。

窪田空穂の「偶然が生涯の運命となる」という論、石田穰一の「宿世はこの世における成行き」であるという論、上坂信男の「漱石は「宿世」と同様に「偶然」を用いている」という論、および中田武司の「宿世」観は、「期待」観と同一線上に考えられる」という四者の論を踏まえて言及した。

筆者の論の一つとして、窪田空穂と上坂信男の論を踏まえて、「宿世」は、「偶然」と同一線上に考えられるという論を考えた。二つとしては、石田穰一の論を踏まえて、「宿世」は、この世の「偶然における成行き」によって生じた「しがらみ」であるという論を考えた。

三つとして、人には、それぞれの「宿世」がある。人は、その「宿世」をどのように受け止めているかによって、その人の人生は決定づけられる。「宿世」を「方便」として受け止めていたと見ることができるといふ論を考えた。

四つとして、「宿世」は、「期待」観と同一線上に考えられるという論を踏まえて、「宿世」は、未来に対する「道しるべ」と成り得る。未来に対する「道しるべ」は、すなわち、「人生の指針」と成り得るといふ論を考えた。以上の論を本文の用

例をもとに考察した。その結果は、本論の見通しの結論として、先に述べた通りである。

源氏は、「この世における偶然の成行き」によって空蟬と邂逅した。源氏は、「宿世」の意味を含む「浅くはあらじ」「さるべきにや」「契り」等の言葉を用いて空蟬を口説いた。源氏が、「宿世」を用いたのは、空蟬を口説くための方便であった。すなわち、源氏は、「宿世」を「方便」として受け止めていたものと見ることが出来る。

空蟬は、「この世における偶然の成行き」によって生じた「しがらみ」によって困惑し、「しがらみ」を「宿世」という言葉によって認識し納得した。すなわち、彼女は、「しがらみ」を、「宿世」として納得することによって心の平安を得た。「宿世」観は、「期待」観と同一線上に考えられることから、「宿世」は、未来への「道しるべ」となり得る。未来への「道しるべ」は、「人生の指針」と成り得る。つまり、空蟬は、「宿世」を「人生の指針」として受け止めていたものと見ることが出来る。空蟬は、「宿世」を「人生の指針」として、誰にも相談することなく、自主的、主体的に生きる道を選択して尼になった。

〔注〕

- (1) 窪田空穂『窪田空穂全集』第九卷 古典文学論一(角川書店 一九六五年十二月)(三二七頁)
- (2) 石田穰二「源氏物語に見る「宿世」の語について」『国語と国文学』(一九八五年六月号)(四頁)
- (3) 上坂信男「源氏物語」と夏目漱石―「宿世」と「偶然」を巡って―(共立女子大学文芸部紀要四十三号 一九九七年一月)(二頁)

- (4) 中田武司「源氏物語の「宿世」観」『源氏物語の探究』第七輯(風間書房 一九八二年八月)(二六七頁)
 - (5) 趙青「宿世」について『人間文化研究年報』(お茶の水女子大)一七号(一九九四年三月)(一一八頁)
 - (6) 「宿世」の辞書の意味を確認する。
- ①『日本国語大辞典』(小学館 一九七四年九月)

すくせ「宿世」(名)。「すぐせ」とも仏語。①過去の世。さきの世。前世。しゅくせ。

②前世からの因縁。宿縁。宿命。宿業。しゅくせ。(三八二頁)

②『角川古語大辞典』(角川書店 一九八七年九月)

しゅくせ(宿世) 名 仏教語。「宿世(シュク)セ」「すぐせ」とも。①前世(ぜんせ) 過去の世。②①より転じて、前世から

の因縁。現世における状態はすべて、前世に作った業因によって規定されるところからいう。「宿世因縁(法華経・授記品)の略。宿縁。ことに現世において、不運な場合に用いることが多い。(二七三頁)

③中村元『広説仏教語大辞典』(東京書籍 二〇〇一年六月)

さきの世、過去の世の意。また宿世の因縁の意に用いる。日本人の人生観・世界観に最もよく浸透した仏教の観念の一つ。(七九一頁)

(7) 多屋頼俊『源氏物語の思想』(法蔵館 一九五三年四月)

源氏物語の作者わ、人生観の根底として、宿世の因縁―因果応報―お信じていた。(八一頁)

(8) 鈴木日出男『源氏物語への道』(小学館 一九九八年四月) (二二五―六頁)

(9) 柴田迪子『源氏物語に於ける宿世』『学習院大学国文学会誌』十二号(一九六九年三月) (二二頁)

(10) 久慈きみ代「他者の視線にさらされる女君たちの宿世―『源氏物語』の宿世―」『駒沢国文』第45号(駒沢大学文学部国文学研究室 二〇〇八年二月) (七一頁)

(11) 上坂信男『源氏物語』における宿世―因縁果律を超えるもの―(共立女子大学文学部紀要四十一号 一九九五年二月) によれば、「宿世」の用例は、一一八例としている。

重松信弘は、『源氏物語の仏教思想』において、「宿世」の用例を二二〇例としている。趙青は、前出著において、「宿世」の用例を一一七例としている。筆者は、新日本古典文学大系『源氏物語索引』によって二二〇例とする。久慈きみ代も筆者と同様二二〇例とするが、書物によって異なることを認めている。

(12) 井上光貞「源氏物語の仏教」『源氏物語講座』下巻 東京大学源氏物語研究会編(紫乃故郷舎 一九四九年十二月) (二二四頁)

「宿世」というのは漠然と運命のことである。(二二四頁)「宿世」という考え方は従つて業の自覚である。(二二六頁)

(13) 目加田さくを「宿世と諦念―源氏物語の場合」『仏教文学講座』第五卷(勉誠社 一九九六年四月)

「源氏物語の宿世は、「人間の前世からの因縁」、更には「男女の結ばれる宿縁」、今日の言葉でよく使う「運命」の意に、用いる」(二三頁)

(14) 佐藤亨『源氏物語』における仏教語―「宿世」とその周辺の語―(文学と教育の会『文学と教育』第二十三集一九九七年六月号)(一五頁)

(15) 森岡常夫『源氏物語の研究』(弘文堂 一九四八年十一月)(二五七頁)

(16) 田中常正「口説に用ゐられた宿世思想―源氏物語に見られる恋愛思想の一面―」『山口大学文学会誌』3―1(一九五二年三月)(四三頁)

(17) 佐藤勢紀子「中古物語文芸における宿世思想の展開―「宿世」の文脈―」を手がかりとして―東北大学『日本思想史研究』第十二号(一九八〇年)(四六頁)

(18) 池田義孝「源氏物語における「宿世」」(『愛媛国文研究』(13) 一九六三年十二月)(五三頁)

(19) 重松信弘『源氏物語の仏教思想』第四章第三節「宿世の思想」(平楽寺書店 一九六七年)

宿世観が物語の基調に据えられている。「宿世」の用例二〇〇例。「契り」の用例一〇七例。「さるべき」など全体で約二七〇例。

(20) 益田勝実『火山列島の思想』「日知りの裔の物語」(筑摩書房 一九六八年)

(21) 小野村洋子『源氏物語の精神的基底』(創文社 一九七九年)

(22) 佐藤勢紀子『宿世の思想』(ベリカン社 一九九五年二月)

宿世の作用―過現未三時を通じての物事の経過をまるごと支配するという―は、私のみるところ、「源氏物語」のほぼ全編にわたって、物語の構造に絡むものとして鮮明にえがきだされている。(一一六頁)

(23) 森田喜朗『日本文学における運命の展開』(新典社 一九九六年五月)

(24) 武原弘「須磨・明石巻の主題―人間存在と宿世、その内在化―」『源氏物語研究集成』第一巻「源氏物語の主題」上(風間書房 一九九八年六月)(二三頁)

(25) 日向一雅「宿世」の物語の構造―「研究講座源氏物語の視界」2 光源氏の宿世論(新典社 一九九五年五月)(五五頁)

(26) 「浅くはあらじ」について、次のような注釈が見られる。

① 山岸徳平校注 日本古典文学大系14『源氏物語』一(岩波書店 一九五八年一月)

【頭注】(私の気持は) 浅くはなからう。(六七頁)

② 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注 日本古典文学全集12『源氏物語』一(小学館 一九七〇年十一月)

【頭注】自分の志が浅くはない、の意。二人の因縁が浅くはない、ととる説もある。(一七五頁)

③ 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注 新編日本古典文学全集20『源氏物語』一(小学館 一九九四年三月) ②に同じである。

以上のような注釈が見られるが、筆者は、「二人の因縁が浅くはない」と取る説を取りたい。というのは、「浅くはあらじ」は、「宿世」とともに用いられる例が見られるという理由による。当該部分は、「宿世」を省略したものと見ている。「宿世」が、「浅くはあらじ」とともに用いられた用例をあげると次のようである。

用例1、絶えぬ宿世浅からで、尼にもなさで尋ね取りたらんも、(帚木・一四三頁)

用例2、「今宵の浅からぬ前の世の契りにこそは」(明石・二四六頁)

用例3、(明石の君と源氏との宿縁が) 浅からぬにこそは。(濤標・二七九頁)

用例4、「のがれぬ御宿世の浅からざりけると思ほしなせ」(若菜下・二二六頁)

(27) 藤井貞和「宿世遠かりけり」考 『源氏物語の表現と構造』中古文学研究会編(笠間書院 一九七九年五月)(六二頁)

【付記】

(1) 本文の引用は、日本古典文学全集『源氏物語』によった。

(2) 本論は、平成二十年度第四十回解釈学会全国大会を、平成二十年八月二十一日(木)、二松学舎大学・九段キャンパスにて開催した時に、口頭発表したものを論文としてまとめたものである。本論文については、鈴木日出男特任教授をはじめ、多くの方々から指導助言をいただいたことに対して深謝する次第である。